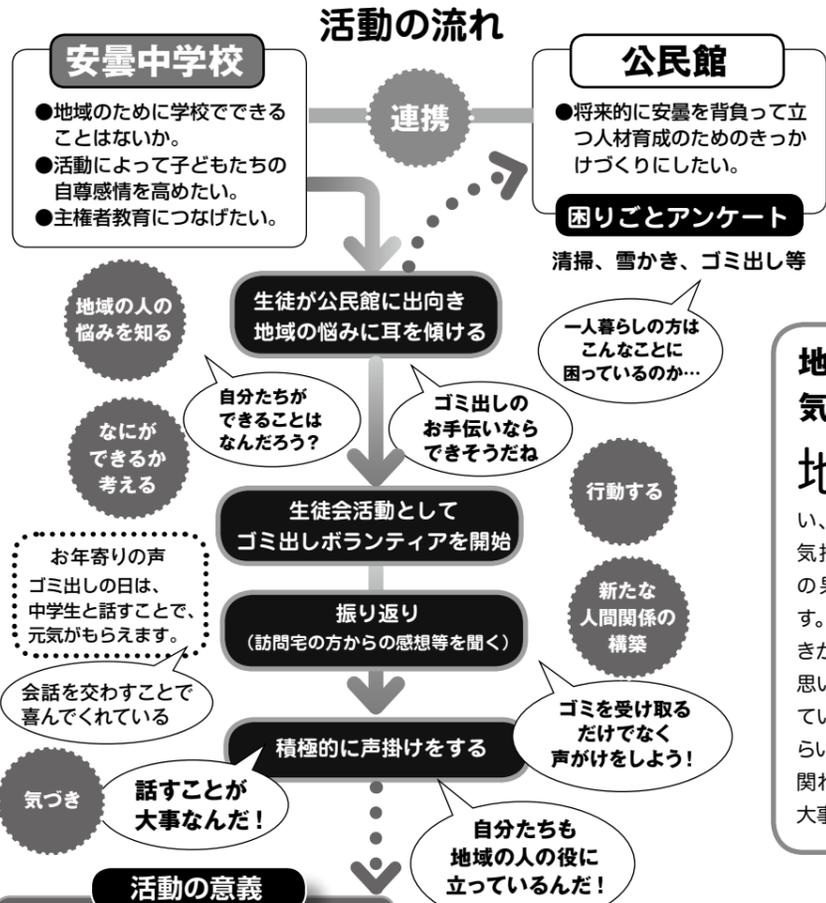


*本紙の特集事例をよりくわしく解説！あわせてご活用ください。

先生方へ
やまびこだより
No.153
今号の特集から

安曇中学校の取り組み

一人暮らしのお宅へ ゴミ出しボランティア活動



地域を「なんとかしたい」という気持ちを育むために

地域の課題を知り、なんとかしなくてはいけない、なんとかしたいと思う気持ちを育てることは、学校の果たす大きな役割の一つです。生徒たちが地域を離れると、安曇小中学校きがきたとしても、地域のことを横山耕二校長先生思い「いつかは戻ってきて地域のためになるう」「離れていてもできることをしよう」という気持ちを持ってもらいたい。そのためにも地域に入って、地域の人と深く関わり、いろいろな思いを感じるという経験はとても大切なことだと思っています。



- 活動の意義**
- コミュニケーション力の向上
 - 自己有用感の育成
 - 主権者教育の推進
 - ふるさと意識の高揚
 - 地域の見守り活動への参加
 - 地域と自分の未来を考える 等

ゴミを回収するお宅の方からの声

- 足が悪く、雨や雪の日のゴミ出しは大変です。中学生が来てくれて本当に助かっています。何かお礼をしたいくらいです。
- みんなニコニコしているのでうれしくなります。「これから寒くなるので気をつけてください」と言ってもらい、本当にうれしくなりました。
- ゴミ出しの日の朝が待ち遠しく、チャイムが鳴ると「あっ、来てくれた！」とうれしくなります。まるで宝物を取りに来てくれるような中学生に、本当に本当に感謝しています。

ゴミ出しを通して地域交流

毎週水曜日の朝、安曇中学校では一人暮らしをしているお年寄りの家を訪問し、ゴミ出しをお手伝いするボランティアをしています。

当初はゴミ出しのお手伝いだけでしたが、活動の中で自然と交わっていた“会話”が、お年寄りから「本当にうれしいこと」と言われ、コミュニケーションがとても大切なものだ気づきました。そこから生徒たちは話し合い、訪問の際、意識的に声掛けをするように心がけ始めました。

始めは“やらされている”感を覚えていた生徒にも変化が見られるようになり、ある生徒は「学校が長期休みになったら誰がゴミ出しをするの？困っちゃうよ」と、自ら進んで休みの日もゴミ出しのお手伝いをする姿も見られました。

阿部悦夫教頭先生は「本校は小規模校なので人間関係が固定化してしまい、自

己有用感に裏付けられた自尊感情を高める必要があるのではないかと感じていました。地域と関わるこうした活動によって、新たな人間関係を構築し、視野を広げ、地域の人の役に立っているんだという自己有用感が子どもたちの中に得られているのではないのでしょうか」と話します。

未来の地域づくりのために

ゴミ出しは困りごとの手助けをするボランティアであると同時に、コミュニケーションの幅を広げ、地域に住む人を知り、自分を成長させる地域学習にもなっています。

県内の中山間地域では地元離れが深刻化しつつあり、それに伴い一人暮らしの高齢者が年々増加傾向にあります。これからの時代、顔見知りやお互い様の関係づくりを進め、地域に住む人を地域で見守ることが求められています。ゴミ出しボランティアは、地域の見守り活動でもあり、安心して暮らせる地域づくりにつながっています。



ふっころ
長野県社会福祉協議会
公式キャラクター

協力：飯綱町立飯綱中学校、松本市立安曇中学校

令和元年10月発行 発行：社会福祉法人 長野県社会福祉協議会 まちづくりボランティアセンター
〒380-0928 長野市若里7-1-7 TEL.026-226-1882 FAX.026-228-0130
E-mail vcenter@nsyakyo.or.jp URL http://www.nsyakyo.or.jp/

地域の人たちが集まる いきいきサロン活動に参加



飯綱町立 飯綱中学校

一人暮らしの高齢者のお宅へ ゴミ出しボランティア活動



松本市立 安曇中学校

特集の概要

地域社会と生きる子どもたち

地域にはそれぞれ、古くから培われてきた文化、先人の心、大切にしてきたモノが数多くあります。自分が住んでいる地域についてそれまで知らなかったことを、子どもたちが自身が地域の人々とふれあいながら学ぶプロセスは、地域の貴重な財産となって未来へと受け継がれていきます。

交流を通して顔見知りが増え、子どもたちにとって地域は「どの誰かわからない人が住んでいる場所」から「知り合いがたくさん住んでいる安心の場所」となります。少子高齢化が進み、互いに支え合う地域づくりが求められる中、世代を超えてコミュニケーションをとることは、子どもたちだけでなく、地域のすべての人々の未来づくりにつながっていきます。

体験学習を通して 様々な視点で地域を見つめる

飯綱町立飯綱中学校では、全校生徒が町内の各地区34ヶ所の「ふれあいいきいきサロン（以下いきいきサロン活動）」に参加

し、自分たちの暮らす地域が改めてどんなところなのか、地域に住む人々と交流をし学んでいます。この活動は3年間で地域とふれあう体験学習の一環です。学年ごとにテーマや視点をもって、フィールドワークや職場体験学習、町への提言などを行っています。

これらの活動を通して、様々な視点から地域を見つめることで、自身の未来や地域の未来を考え創り出す力を身に付けています。

地域の困りごとを生徒会活動で

松本市立安曇中学校では、生徒会活動として、学校の周辺地区である島々地区で一人暮らしをしているお年寄りの家のゴミ出しをお手伝いするボランティアをしています。

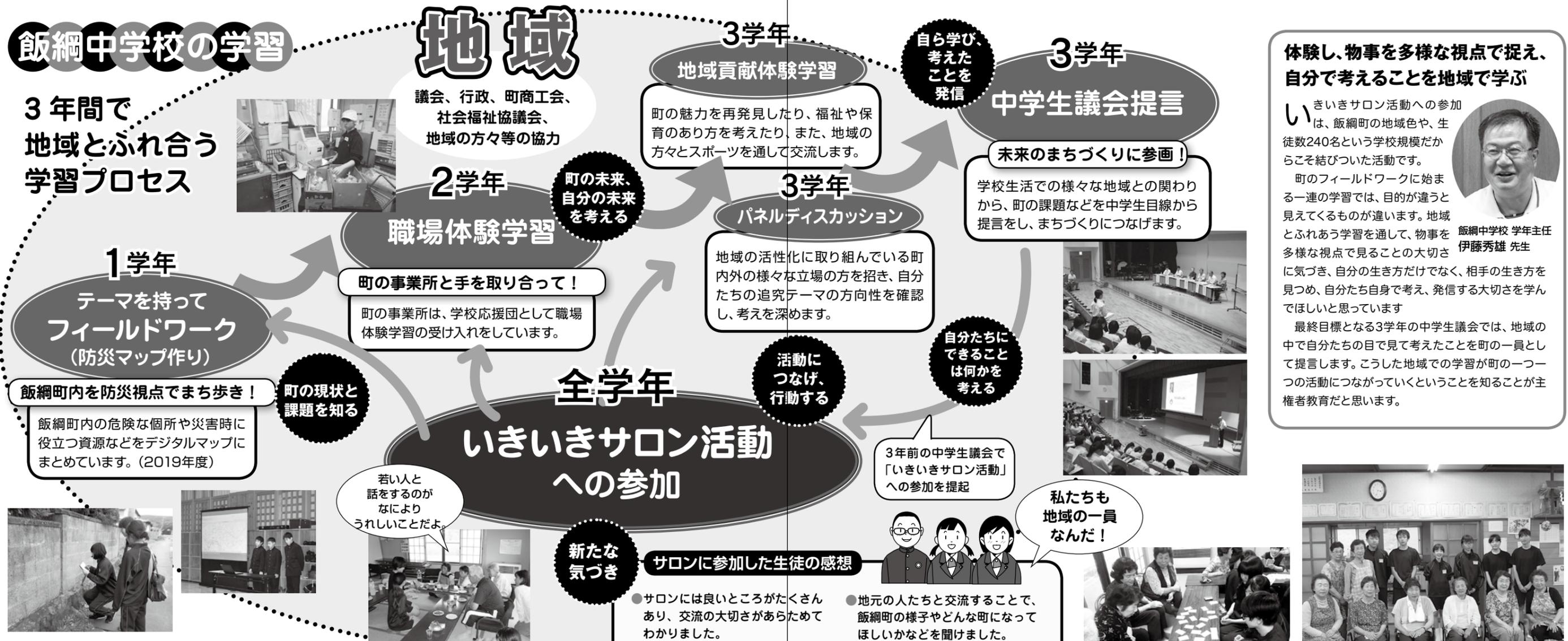
この活動を始める以前から地域でボランティア活動をしたいと考えていましたが、学校だけでは地域にどんな人が住んでいるのか、どんなニーズがあるのかを把握するのは難しく、自分たちに何ができるのかと模索していました。そこで、公民館と協力し地域の声に耳を傾けることから活動を

始めました。公民館が地域に困りごとのアンケートをとったところ、雪かきなどいくつかの困りごとが挙げられました。その中で中学校でも協力できそうなことを公民館と話し合い、一人暮らしの高齢者宅のゴミ出しなら学校の空き時間を活用してできそうである、と2017年度から活動が始まりました。

地域を通して 自分の未来を考える

地域での活動は、何気ない声掛けやコミュニケーションがとても喜ばれ、知らないことを知ることができる機会となります。世代を超えて、様々な人と交流をした経験は未来に活かされます。学校の中だけでは学べないことが地域には溢れています。

地域にある魅力や課題を知り、地域のためになることを自ら考えることは、未来に生きる学びです。自分たちの暮らす地域を自分たちで支えていくことが地域の存続に深く関わる時代において、両校の活動はふるさと意識を育み、地域や自身の未来を創り出す力を養う上で有用な取り組みとなっています。



体験し、物事を多様な視点で捉え、自分で考えることを地域で学ぶ

い きいきサロン活動への参加は、飯網町の地域色や、生徒数240名という学校規模だからこそ結びついた活動です。

町のフィールドワークに始まる一連の学習では、目的が違うと見えてくるものが違います。地域とふれあう学習を通して、物事を多様な視点で見ることの大切さに気づき、自分の生き方だけでなく、相手の生き方を見つめ、自分たち自身で考え、発信する大切さを学んでほしいと思っています

最終目標となる3学年の中学生議会では、地域の中で自分たちの目で見て考えたことを町の一員として提言します。こうした地域での学習が町の一つ一つの活動につながっていくということを知ることが主権者教育だと思います。



飯網中学校 学年主任 伊藤秀雄 先生

地域を活かした学び

飯網中学校は、飯網町唯一の中学校で、学びの基盤に「地域」は欠かせない存在になっています。「学校や地域」ではなく「学校も地域」と考えています。

1学年ではテーマを持ったフィールドワークとして防災マップを作ります。マップを作る上で、防災に活かせる資源や課題を探しに町内を歩きます。

2学年では職業体験学習を行う際、町にある様々な事業所が学校の応援団となり、体験の受け入れをしてくれます。

3学年では、さらに地域貢献体験学習とパネルディスカッションを行い、町で見つけた様々な課題を中学生の視点から「中学生議会」として、町に提言をします。

そして、全学年を通じての活動がいきいきサロンへの参加です。地域の実情を知る上で、サロン活動への参加が有効な手立て

飯網町「ふれあい いきいきサロン」

町の地域福祉の充実のため、小地域等を対象に住民自らが定期的に交流やふれあいの場を設けることにより、高齢者をはじめ地域の仲間づくり、生きがいの場とすることを目的とした飯網町社会福祉協議会による事業です。年間を通して4回以上開いています。

だと分かり、3年前の「中学生議会」の提言において今年度から全校を挙げてサロン活動に参加することにしたという経緯があります。

主権者意識とふるさと意識を育む

出口哲朗教頭先生は「単に学校の学びの受け皿として地域があるだけでなく、子どもたちがふだん暮らす町を、「自分たちが」暮らす町として改めて見つめ、地域を深く知ることによって、町の良さや課題を自分たちで考え、中学生なりの主権者意識やふるさと意識を育むことにつながると思っています」と話します。

「近年、コミュニティスクールが推進されていますが、生徒が地域に出かけることでより多くの人と知り合うことができ、学校と地域のつながりをより深くすることができます」

中学校は町のシンボル

飯網中学校は昨年50周年を迎えました。もともとは旧牟礼村と旧三水村の組合立の中学校で、地域の象徴となる飯綱山からとり、飯網中学校が誕生。14年前、両村が合併して飯網町立となりました。7年前

には校舎を改築し、図書館や講堂、体育館を町民に開放して地域に開かれた空間となっています。

出口教頭先生は「近年、核家族化や共働きで家族でさえも顔を合わせる機会が少なくなっています。中学生の生活圏は、学校が多くを占めるため、学校を地域に開いた場所にする事で、学校の中に「サザエさん」の磯野家のようなアットホームな空間が学校につくられるのではないのでしょうか。飯網中学校は今では町のシンボルになっています」と話します。

サロン活動の意義を知る

サロン活動は「はじめまして」という方から「乳飲み子の頃から知っているよ」という方まで、和気あいあいと話しながらお茶を飲んで、笑顔に満ちた場が広がっていました。顔をつき合わせたコミュニケーションが少なくなる現代社会の中で「サロン活動」を大事にする住民の方がいます。「ただ、集まってお茶をするだけ」でも、そこに大切な思いがあり、笑顔があります。

サロンでは「中学生が来るからいつもよりも奮発した！」と腕を振って料理を作ったり「こんな方言知ってるか？」と地域の文化についておしゃべりする地域の方々がありました。中には温泉で裸のつきあいをするサロンもありました。ふだんの何気ないサロン活動に中学生がいてくれることを大

変喜ぶ地域の人が多いです。

少子高齢化が進むこれからの時代、地域での支え合いは必要不可欠です。地域を活かした学習の中で、顔を合わせたコミュニケーションを通し、少しでも顔見知りの関係になることで支え合いの心が育まれます。

授業設計の中心となる担当の伊藤秀雄先生は「学校で提供される学びは、子どもたちの未来を作るためのものです。地域とふれあう学習経験が種となり、きっといつかどこかで花開き、実を結ぶときがくるはず。それは地域にとっての未来づくりにもつながります。彼らが将来、飯網町のことを思い、地域のため、誰かのために役に立てる人になってもらいたいと願っています」と話します。

